



Title	青年期前期における被虐待経験者の心理・社会的不適応への影響要因
Author(s)	出野, 美那子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49163
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	出野 美那子
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 21709 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	青年期前期における被虐待経験者の心理・社会的不適応への影響要因
論文審査委員	(主査) 教授 藤田 紗子 (副査) 教授 宮田 敬一 教授 南 徹弘 准教授 権藤 恒之

論文内容の要旨

第 1 章 序論

被虐待体験を持つ子どもは、幼少期から培われる愛着に歪みが生じ、対人関係様式へ影響し、対人関係における問題を中心として、心的外傷性症状などの心理・社会的不適応を呈するという臨床的知見、不適応に関する認知的側面の影響に関する実証的研究が概観される。子どもにおける対人関係の問題を把握すること、被虐待経験者において心理・社会的不適応への影響要因を実証的に検討することが重要であると思われる。本研究では被虐待体験を受けた子どもの心理・社会的不適応として、心的外傷性症状や対人関係の問題に関する実証的研究を行い、子どもの情緒的/行動的問題に関する理解を深め、子どもに対する援助への臨床的示唆を得ることを目指す。

第 2 章 青年期前期における被虐待経験者の愛着状態と心的外傷性症状

：児童養護施設で生活する子どもを対象として

青年期前期の児童養護施設で生活する子どもの愛着スタイルと被虐待体験との関連、愛着スタイルのどの特性が心的外傷性症状に影響を及ぼしているかを検討すること、愛着状態と心的外傷性症状との関連について性差を検討することを目的とする。児童養護施設 10 施設で生活する中学生 146 名、児童養護施設担当職員 109 名を対象とした。子どもに愛着スタイル尺度、心的外傷性症状について尋ね、職員に子どもの属性について尋ねた。階層的重回帰分析の結果、虐待の有無による影響は見出されず、男子より女子の方が心的外傷性症状は強く、両性の愛着特性が心的外傷性症状を強めることが明らかとなった。虐待の有無による影響は対人関係の問題により現れる可能性が示唆された。

第 3 章 青年期前期の子どもにおける対人関係機能不全尺度の作成

第 1 節 児童期中期から青年期前期の対人関係機能不全尺度作成の試み

：児童養護施設で生活する子どもを対象として慢性反復性トラウマ反応の視点から

被虐待体験の存在が強く関与するとされ、対人関係に複雑な影響が現れている状態である慢性反復性トラウマ反応の視点を用い、子どもに見られる対人関係における問題を整理することを目的とする。児童養護施設 10 施設で生活する小学 4 年生～中学 3 年生 206 名について、担当職員 101 名に回答を求めた。使用した項目は、児童養護施設で生活する子どもに認められる特性や問題とみなされる行動に関する項目 64 項目であった。慢性反復性トラウマ反応に

該当すると判断された 43 項目について、探索的因子分析、ステップワイズ因子分析を行った結果、29 項目について「攻撃性」「回避と孤立/対大人」「衝動調節困難」「反社会的行動」「愛着行動の希求と回避」「回避と孤立/対他児」の 6 因子が抽出された。「回避と孤立・対大人」以外の 5 因子において因子的妥当性と信頼性が確認された。

第 2 節 青年期前期の子どもにおける対人関係機能不全尺度改訂版の妥当性の検討

対象者を一般家庭で生活する子どもに広げて、より普遍的な尺度としての対人関係機能不全尺度改訂版を作成すること、改訂版の構成概念/基準関連妥当性を子どもの行動や情緒の問題を測定する CBCL との関連によって検討することを目的とした。児童養護施設 8 施設で生活する中学生 75 名と一般家庭で生活する中学生 110 名を対象とし、担当施設職員 29 名、担任教諭 18 名に回答を依頼した。CBCL、第 3 章第 1 節で作成した対人関係機能不全尺度 29 項目（以下原版）に新たな項目を加えて、分析を行った。「攻撃/衝動的行動」「脅えと不安」「回避と孤立」「愛着行動の希求と回避」の 4 因子 23 項目からなる対人関係機能不全尺度改訂版が作成された。次に、CBCL との間に有意な相関が認められ、収束的妥当性が確認された。CBCL の T 得点 70 以上の臨床傾向群において得点が有意に高く、一定の基準関連妥当性が確認された。一方で、概念的に対応しない組合せとの間にも有意な相関と得点差が認められたため、弁別的妥当性は確認されなかったものの、臨床的援助への示唆を得ることを目的として、因子ごとに検討することとした。

第 4 章 青年期前期の子どもにおける被虐待体験と対人関係機能不全との関連

被虐待体験のある群/ない群/一般家庭群の別によって対人関係機能不全尺度における差異を検討すること、虐待の種別による対人関係機能不全尺度の差異を検討することを目的とした。対象者と調査方法、調査内容は第 3 章第 2 節と同様であった。対人関係機能不全尺度において、一般群と虐待あり群、虐待なし群とあり群において差異が見られ、虐待の影響に加えて、施設入所に伴うもしくは入所以前の経験によると考えられる影響が見出された。また虐待の種別について、身体的虐待経験とネグレクト経験により対人関係の問題において先行研究を支持する特徴が認められた。以上のことから、対人関係機能不全尺度は、子どもに見られる問題の中で対人関係における問題をより詳細に測定できるという特質を持つこと、虐待による影響を測定することに適している可能性が示された。

第 5 章 青年期前期の被虐待経験者におけるライフィベンツの対人関係機能不全・心的外傷性症状へ及ぼす影響

青年期前期の子どものライフィベンツとして、養育者との死別、離別、いじめの被害の有無に焦点づけ、それらが被虐待児において対人関係の問題、心的外傷性症状に及ぼす影響を検討することを目的とする。対象者と調査方法は第 3 章第 2 節と同様であった。第 4 章と同様の質問内容に加え、子どもに対して心的外傷性症状について尋ねた。結果から被虐待経験者の中でいじめ被害を経験している割合は多かったが、被虐待体験といじめ被害経験は各々単独に問題や症状を高めたことが認められた。また喪失経験のいずれかを持つことで対人関係の問題が高いことが示された。心的外傷性症状と対人関係の問題の関連は薄かったため、心的外傷性症状は体験の主観的意味付けや、症状の感じ方や訴え方が個人の特性によって変化する可能性が示唆された。

第 6 章 被虐待経験者におけるライフィベンツ、愛着スタイル、対人交渉方略が

対人関係機能不全と心的外傷性症状へ及ぼす影響

被虐待体験による愛着スタイルと対人交渉方略への影響を検討すること、被虐待体験、ライフィベンツ、愛着スタイル、対人交渉方略が対人関係機能不全と心的外傷性症状へ及ぼす影響を検討することを目的とする。対象者と調査方法は第 3 章第 2 節と同様であった。第 5 章の調査内容に加え、子どもに対して、愛着スタイル尺度、対人交渉方略測度について回答を求めた。結果から、愛着スタイルのとらわれ型では自己評定による症状が高く、拒絶型では他者評定によって問題の高いことが見出された。また、被虐待経験者で対人葛藤に際して自分の欲求を抑える子どもは、他者の視点から物事を見ることができないものの対人関係の問題は少ない一方で、被虐待経験者で、対人葛藤に際して協調的方略を探る子どもは、対人関係で脅えが強いという特有の傾向が見られた。このことから被虐待経験者において、対人関係における不適応は対人葛藤に関する認知と線形的な関連を持たず、対人葛藤に関する情動的側面の重

要性が高い可能性が挙げられた。

第7章 総合論議

本研究で作成した対人関係機能不全尺度は感情表出方略、記憶方略の実験などと合わせて実施することによって、被虐待体験に関連する要因についてより多面的な評価に貢献するものと考えられる。またいじめ被害と喪失体験が対人関係機能不全へ影響を及ぼすことが見出され、心理的・身体的反応だけでなく対人関係の問題においても、否定的ライフィベンツの影響について検討する必要性が示された。被虐待経験者の心理的援助を考える上で、被虐待経験者の愛着状態を長期的に変動させる要因を今後詳細に検討することが必要であろう。被虐待経験者の対人葛藤の認知と、その対人関係の問題への影響には特有の傾向が見られた。青年期前期の対人関係においては、対人交渉方略の認知的発達と情動調節方略との関連、被虐待経験者特有の特徴に焦点付けて、評価と援助を検討することが必要である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、被虐待体験を受けた子どもの心理・社会的不適応として、心的外傷性症状や対人関係の問題に関する実証的研究を行い、青年期前期の児童養護施設で生活する子どもに対する援助への臨床的示唆を得ることを目指した。

第2章では、被虐待体験、愛着スタイルの特性と心的外傷性症状の関連を検討し、愛着状態と心的外傷性症状との関連について性差を検討した。虐待の有無による影響は見出されず、男子より女子の方が心的外傷性症状は強く、両性の愛着特性が心的外傷性症状を強めることを明らかにしている。

第3章第1節では、子どもに見られる対人関係における問題を把握する尺度を作成し、内容的妥当性、因子的妥当性と信頼性を確認した。第2節では、対象者を一般家庭で生活する子どもに広げて、対人関係機能不全尺度改訂版を作成し、改訂版の構成概念/基準関連妥当性を子どもの行動や情緒の問題を測定する尺度（CBCL）との関連によって検討した。結果から、収束的妥当性と一定の基準関連妥当性が確認された。

第4章では、被虐待体験の有無と種別によって、対人関係機能不全尺度における差異を検討した。一般群と虐待あり群、虐待なし群とあり群において差異が見られ、虐待の影響に加えて、施設入所もしくは入所以前の経験によると考えられる影響が見出された。また身体的虐待経験とネグレクト経験により、対人関係の問題において先行研究を支持する特徴が認められた。

第5章では、ライフィベンツとして、養育者との死別、離別、いじめの被害の有無に焦点づけ、それらが対人関係の問題、心的外傷性症状に及ぼす影響を検討した。喪失経験のいずれかを持つことで対人関係の問題が高いことが示された。心的外傷性症状と対人関係の問題の関連は薄かったため、心的外傷性症状の感じ方や訴え方が個人の特性によって変化する可能性が示唆された。

第6章では、被虐待体験による愛着スタイルと対人交渉方略への影響を検討し、被虐待体験、ライフィベンツ、愛着スタイル、対人交渉方略が対人関係機能不全と心的外傷性症状へ及ぼす影響を検討した。愛着スタイルのとらわれ型では自己評定による症状が高く、拒絶型では他者評定によって問題が高かった。また被虐待経験者で、対人葛藤に際して自分の欲求を抑える子どもは対人関係の問題は少ない一方で、対人葛藤に際して協調的方略を探る子どもは、対人関係で脅えが強いという特有の傾向が見られた。

第7章総合論議 対人関係機能不全尺度は感情表出方略、記憶方略の実験などと合わせて実施することによって、被虐待体験に関連する要因についてより多面的な評価に貢献するものと考えられる。また対人関係の問題において、否定的ライフィベンツの影響についても検討する必要性が示された。被虐待経験者の心理的援助を考える上で、被虐待経験者の愛着状態を長期的に変動させる要因、対人葛藤の認知の特徴を今後詳細に検討することが必要であろう。これまで、被虐待経験と心理的適応を介在する要因について臨床的な研究は行われていたが、定量的・実証的な研究はなされていなかったことを、量的研究を可能にする研究対象者の確保に大変な努力を払い検討を重ねたという点では非常に意義深いと考えられる。

以上のことを総合すると、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。